

ご存知のように、アイヌ文化は森羅万象、全ての生物やモノにまでも魂を認めるアニミズムを基本としています。欧米やイスラム圏とは異



ラマツ(魂)と玉の緒

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

なり、アジアの国々の土着の宗教は日本の神道もそうであるように、アニミズム、つまり多神教です。日本は6世紀頃中国から韓国経由で仏教が伝来し、聖武天皇が国をまとめるという政治目的のため、全国に国分寺、国分尼寺を作りましたが、八百万の神様を祀る神道もそのまま残りました。また仏教自体も多神教であることから、神道が仏教と合体して、山岳宗教という形態に至ったものもあります。アイヌ社会では亡くなった人は神となりますが、神道でも亡くなった人は神となって子孫を見守ると考えられていて、神社に祀られている神々の名称も～の命(尊)であることが多いように、男性は命女^{みこと}女性は刀自命^{とじのみこと}という尊称が与えられます。実際、日本の神社に祀られている神様が実在の人物である例は明治天皇を祀る明治神宮、楠木正成の湊川神社、豊臣秀吉の豊国神社など枚挙にいとまがありません。

このように死んでも無くならないことになっている魂は、アイヌ語ではラマツ(ramat)ですが、この言葉は、ラム(ram-心)、アツ(at-紐^{ひも})という2つの言葉から成っています。この「紐」を意味するアツとはいったい何のことでしょうか。

アイヌ民族は狩猟民族でしたので、捕獲した動物を解体するため、心臓から大動脈が出ており、大動脈が切れると心臓が動かなくなるということを知っていました。このため、大動脈、つまり魂の紐に命の根源があると考えたのです。このような考え方は同じ狩猟生活を送っていた縄文人にも共通していたと考えられます。一方、日本では、新古今和歌集に「玉の緒よ 絶えねば絶えね ながらへば 忍ることのよわりもぞす

る」(式子内親王)という歌があるように「玉の緒」は「絶ゆ」「継ぐ」「思ひ乱る」などにかかる枕詞とされてきました。玉はこの場合魂の意味で使われています

が、当時「緒」は玉を通す紐と解釈されていたようです。万葉集の時代から魂という文字もあったのに(16巻3889番歌)、玉が使われたのはそのためかもしれません。個人的にはこの「玉(魂)の緒」という表現が、歌が作られた平安期の雅とは違和感がある気がして、長年疑問に思っていました。ところが、「緒」が心臓から出る大動脈のことを意味するなら、「絶える」に掛かる枕詞であるということも、平安文化の雅と何か相いれない感じがすることも理解できます。

では、魂はいったいどこに行くのでしょうか。アイヌの人々は、人が亡くなるといったん「あの世」に向かうけれども、再び生まれ変わるためにこの世に戻ってくると考えていました。一種の魂のリサイクルです。但し、この再生するための期間は生前の行いにより異なり、善行を積んだ人はその期間が短く、悪人は時間がかかります。アイヌ世界には「地獄」という考え方はありませんが、悪人は、あの世はあの世でも、環境劣悪といわれるポクナモシリ(pok-下na-方のmosir-国土)に行かなくてはなりません。この場所は、はじめじめとした湿地または砂漠で食物もろくないなど、人々にとっては決して住みたくないような場所です。したがって、アイヌの人々はそのようなところでもないと行くのを避けるため、生きている間は懸命に善い行いをするべく務めました。死んだら全ては無に帰し、その後はないという考え方もありますが、そうすると生きている間にどんな悪事を働いても法律で罰せられない限りペナルティは無いことになります。より良い世の中とするのに役立つのはどちらでしょうか。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び、実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~13』(北海道教育委員会、2008~2022年)等。